

<評>

年度替わりの季節、仕事に進学に環境が変わる人も多いでしょう。世界の情勢も不安要素が多く難しい時代です。こんなときこそ文芸が果たす役割の重みが増してくると思われま
す。ご研鑽を祈ります。

あぐらに慣れる前にうどん来る

長谷川柊香 埼玉県

——食べるという行為は、場の雰囲気と分かちがたいもの。こちらの気分が整わないうちに注文品が来てしまう。早くて良いようなものだが、はぐらかされたような気がするの
はなぜだろう。現代のシステムチックな味気無さ。

きりたての前髪

風になびかせて

たるとたたんのようなきゅうじつ

さいう 石川県

——ひらがなのうまい使いかた。お洒落なケーキと切り立ての前髪がリズムカルに呼応す
る。

自分ではよく分からない朧月

奎いう子 佐賀県

——日常でも季語としても一般に使われる朧月ということだが、こういう風に使われると
ある特定のものとなり、新鮮だ。「自分では」がそれを強調する。

山朧指を濡らして土筆摘む

田崎森太 東京都

——なにやら生き物の気配も感じる「山朧」という季語にふさわしい「指を濡らした」と
いう官能的な言葉。

判子が顔に顔が判子に

西尾日月 島根県

——古代から人や権威の認証に使われた判子が、ついに個人の顔にとって代わる。代々引き継がれるものはどうなるのだろう。

どの嵐の中も妙に明るくて

シンクの銀は夏の仮縫い

常田 瑛子 山口県

——一行目と二行目は一見関係ない。しかし嵐、銀、夏、仮縫いは期待に満ちている。

文脈は線路を渡り花びらの

ような歯型がうっすら残る

常田 瑛子 山口県

——言葉が生き物であることをまざまざと教えてくれる美しい作品。

槍っぱい雨をかついで労働者

なぜ透明になろうとするの

五月閉じ花 北海道

——「労働者」という言葉は日常的にはもうあまり聞かれないし定義も違ってきているだろう。そこに槍などが出てくると不思議に時代が混乱する。混沌のなかで不分明に透明化していく存在なのかも知れない。

私小説だから椿は美しい

飛和 長野県

——椿は花卉が崩れることなく落ちる。私小説という自ら完結した世界の堅牢な美しさ。

カクレクマノミが桜になってゆく

金光 舞 埼玉県

——春の不動の人気者が桜からカクレクマノミになっていくのか。人気の質が違ってきたのか。

バイト後釈迦らしく寝て春の雪

秋山颯汰朗 群馬県

——バイト後のごろ寝。春の雪がなすこともなく降っている。「釈迦らしく」寝るというポーズが状況を端的に表している。

あたらしいことは

いつでもこわいから

これも

くさかんむりのかみなり

石村 まい 兵庫県

——蕾を「くさかんむりのかみなり」というのは新鮮な面白さがある。新しい世界に開きかけることは怖いだろう。

マグカップの持ち手

インテグラルみたい

たぶん

進路の話をしてる

松浦やも 東京都

——聞かなくてはならない重要な話だが心はそこにはない。インテグラル記号には「欠かせない」という意味もあるが今は不意に意識が離れていく。

春愁で明日の句会は休みます

平 人工 宮城県

——思わず笑ってしまう。そういえば季語には季節の憂いを表すものが多い。定石化された憂いの扱いは難しいだろうが。

んめ、んまと父はいった梅と馬

鶯浦 るか 富山県

——歴史や地勢が言葉の中には隠れている。作者は注意深い愛情をもって言葉に向かっているのだろう。

バターを切り分ける

パンに塗る

バターの残りを冷蔵庫にしまう

すこし泣く

白鳥 陽太 神奈川県

——日常の何気ない動作のなかに不意にこみあげてくるものがある。それは思い出というよりも、人があらかじめ持って生まれた悲哀かもしれない。

海に来て主語述語ある独り言

太朗千尋 東京都

——普通、独り言には他者に対するような主語述語は使わないものだ。しかし海に来ると自分の中に、大きく包んでくれるもう一人の自分である親しい他者を感じる。対話が始まる。